【385】

氏　名（本籍）	村上勇介（長野県）
学位の種類	博　士（政治学）
学位記番号	博　乙　第　2535　号
学位授与年月日	平成23年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	**フジモリ時代のペルー** －救世主を求める人々、制度化しない政治－

主　査	筑波大学教授		遅野井　茂　雄
副　査	筑波大学教授	法学博士	松　岡　　完
副　査	筑波大学教授	博士（法学）	辻　中　　豊
副　査	筑波大学教授	博士（政治学）	中　村　逸　郎

論文の内容の要旨

本論文は、ペルー政治に通底する制度化を妨げる政治文化の連続性と、歴史的、構造的な特徴の中に、フジモリ政治を位置づけ、政権の登場から崩壊までを分析している。1990年代のペルー政治における継続的な参与観察とフジモリ政権関係者への多数の聞き取り調査に基づき、フジモリ政権時代（1990～2000年）の政治過程を分析し、その特徴を解明しようとしている。

全8章から構成される。

序章では、フジモリ政権に関する先行研究を整理・検討する。フジモリの政治手法やスタイルから政権を捉えようとする既存の解釈に異論を唱え、フジモリ政治を理解するためにはそれだけでは不十分であり、ペルーの政治社会を貫く権威主義的な特徴から捉えることが必要であるとして、制度を基軸とした説明仮説を提示する。

第1章「ペルー政治への視角」では、約200年にわたる共和国政治史を振り返り、ペルー政治が、パトロン＝クライアント（PC）関係を基盤とし、一貫して個人主義的（personalistic）指導性と、中長期的な合意形成を阻害する非民主的な構造によって特徴づけられると同時に、短期的な観点から指導者に問題解決を期待する国民の意識や態度と共鳴関係に立つと説明する。成員間で広く承認されている行動定型やルール、規範、了解事項として定義される、制度の視点からペルー政治を捉え直した研究の中心的な章である。

第2章「フジモリ政治の胎動」では、経済危機と治安悪化の中で争われた1990年の選挙過程を分析するとともに、政治家としてのフジモリの誕生を、ペルーの政治文化の特質との一致の視点から跡づける。つまり組織基盤よりも人々との直接的な関係、期待感による支持と成果を交換するPC関係、直面する問題の克服への関心、合意や了解を積み重ねるのではなく少数の側近との政策決定の特徴をフジモリが備えていた点を明らかにし、ペルー政治の歴史的、構造的な特徴を反映したカウディジョ・タイプの権威主義的な政治家フジモリの誕生を総括している。

第3章から第6章まで、フジモリ政権を第1期（1990～95年）、第2期（1995～2000年）、第3期（2000年）に分けて、その政治過程を分析している。

第3章「フジモリ政権の発足から憲法停止措置の収拾まで（1990～92年）」では、政権関係者への聞き取り調査を基に、軍を動員して憲法停止と議会閉鎖に及んだ措置（「自主クーデター」）が、先行研究で重視される新自由主義的な経済政策をめぐる軋轢以上に、大統領罷免の画策、大統領権限の制限化、テロ対策などの争点をめぐるフジモリと野党勢力との対立に起因するものであった点を確証する。同時に、フジモリと同様に非民主的な行動形態をとる野党勢力の意図や思惑などを考慮に入れ、強権措置の導入を両者の相互作用の帰結として把握することが重要であると主張している。

第4章「フジモリ再選への過程（1993～95年）」では、重要な争点となった大統領への再選立候補を、1990年頃からフジモリが目論んでいた可能性を主張する主要な先行研究とは異なり、短期的な視点から政治状況の変化に対応して決定したものであった点を解明している。

第5章「第二期フジモリ政権の失墜（1995～98年）」では、第二期政権では、雇用や貧困、格差などの問題に取り組み、中長期的な観点からペルー社会の発展を図ることが重要な政策課題であったが、フジモリは第1期の政治手法を変えることなく、中長期的な展望や計画について提起することも、合意や了解を形成する努力も行わず、支持を失っていくプロセスを解明している。

第6章「フジモリ政権の終幕（1999～2000年）」では、2000年選挙へ向けた動向からフジモリ政権崩壊までの政治過程を、権力闘争の実態を詳らかにしながら丹念にフォローしている。その中で特に、1995年選挙で勝利を確信した直後に連続三選への意欲を示したこと、支持の低下を契機に三選立候補を断念する選択を真剣に考えていたが、顧問のモンテシノスの説得もあり、第三期政権を政権交代の準備に充てる「軟着陸構想」を描いて三選立候補を決意した点など、新しい視点を提示している。

終章は、以上の分析からフジモリ政治を再検討し、歴史的にみられたペルー政治の特徴は変わることはなかったとの結論を導いている。

最後に、他のラテンアメリカ諸国との比較、特に1970年代末以降の民主主義への移行後の比較研究に対する研究の含意として、制度化の程度の相異を考慮に入れる必要があること、歴史的な経路依存の検証をする必要がある点を提示し、その中での制度化の低い参照基準としてのペルーの重要性を強調している。

審査の結果の要旨

本論文は、フジモリ政権の政治過程を詳細に追い、先行研究の渉猟とともに、聞き取り調査に基づく徹底した実証によって、フジモリ政権の誕生と崩壊に至る構造と特徴を解明している。

毀誉褒貶をもって語られることの多いフジモリ政権について、制度を軸とする経路依存の中にフジモリ政治を位置づけ、その本質を抉り出すことに成功している。長期的な合意形成を阻み、権威主義的個人主義的な指導性を特徴とする政治文化と、政治社会に統合されることなく強力な指導者に短期的視点から結果を求める「原子化した」国民とが相互に共鳴しながら、政治が展開される過程が説得力をもって論じられている。ペルー及びラテンアメリカ研究、比較政治学の学識に立脚した完成度の高い大部の業績である。

PC関係を重視する著者のペルーの政治文化についての理解は、J・コトレール等の内外の主要な既存業績に基づくものであり新味は少ないが、本論文の最大のメリットは、上述の評価に加え、詳細な先行研究の検討と政権関係者への聞き取り調査を通じて、重要な争点について検証作業を行うとともに、数多くの修正的な見解を提示している点であり、フジモリ政治、ペルー政治について新たな理解を切り開いた学術的な貢献は極めて大きい。

本論文は、刊行後、数多くの書評が取りあげ、日本貿易振興機構アジア経済研究所の発展途上国研究奨励賞を受賞した。また現地ペルーでも、ペルー研究センターとして世界的権威のあるペルー問題研究所（IEP）からスペイン語版が出版され（参考論文参照）、フジモリ時代の政治過程に関し、内部情報に裏づけられた

実証的な研究として高い評価を獲得している。現代ペルー及びラテンアメリカ政治研究において、日本人の研究としては最も被引用度数の高い研究となっている。

もっとも本研究は、政治文化を一元的に捉えるあまり、市民社会や市民文化における多様性や変化を捨象している面は否めない。制度の働きをつまるところ政治家や有権者の行動パターンに帰するような狭義の捉え方がみられ、制度と密接に関係する政策面での分析が弱く、制度構築への手がかりが伝わってこないという限界もある。また制度を問題としながら新制度論との関係で議論が不足している物足りなさも残るが、上述の学術的な価値をいささかも損なうものではない。

論文審査ならびに審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。よって、著者は博士（政治学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。